

シンポジウム

「育児室の戦争」

ー心理学化される戦争、あるいはイギリスの精神分析ー

遠藤 不比人

第一次世界大戦の表象不能性に関して注目すべきは、それが表象不能な「過剰」となって別の表象に置き換えられるという点だ。戦争は言語に収容できない「トラウマ」と化す。イギリスの女性分析家たちは「母子関係」特に「母娘関係」を「育児室の戦争 war in the nursery」と見なした。しかしなぜ、戦争は「母子関係」という「過剰」として反復、置換されるのか？ イギリスの女性分析家 Joan Riviere から引用する。

[...] flatus and urine are all felt to be burning, corroding and poisoning agents. Not only the excretory but all other physical functions are pressed into the service of the need for aggressive (sadistic) discharge and projection in phantasy. Limbs shall trample, kick and hit; lips, fingers and hands shall suck, twist, pinch; teeth shall bite, gnaw, mangle and cut; mouth shall devour, swallow and 'kill' (annihilate); eyes kill by a look, pierce and penetrate [...].

Joan Riviere, 'On the Genesis of Psychological Conflict in Earliest Infancy' *The Inner World and Joan Riviere: Collected Papers 1920-1958* ed., Athol Hughes (London: Karnac, 1991), 286.

生後間もない乳児と母親との関係は、乳児が母を食べ排泄するというイメージと化す。これはフロイトのいう oral sadism をイギリスの女性分析家たちが独自に発展させたものである。その彼女らに決定的な影響を与えたのがベルリンで分析をしていた Melanie Klein であった。その Klein をベルリンからロンドンへ招聘したのが Alix Strachey である。このことにより、イギリスの精神分析は「父親中心」のフロイトの精神分析とは異なる

る「母親中心」の心理学と化した。この「母子関係」の歴史的な文脈として、戦争と同時にイギリスにおける

フェミニズムを指摘することができる。戦前の *old feminism* と戦後の *new feminism* の間にある *generation gap* が注目される。戦前に参政権のために戦った世代と、戦後の *emancipated daughters* との関係が重要である。戦後の厭戦気分の中、政治的かつ性的な自由を謳歌する「解放された娘たち」にとって、戦前の戦闘的フェミニストが一種 *monsterize* されたという事実が重要である。戦前の戦闘的フェミニズムが *sex-war* というレトリックを生むが、それは戦後の厭戦気分の中でイデオロギー的アレルギーを生み、このように怪物化された映像と化した。

Alix Strachey は戦後の *reluctant feminist* の典型である。Alix の母親 Mary Sargant Florence は典型的な戦前の戦闘的なフェミニストであった。Alix の未刊行の書簡には、母が娘に強要する過激な政治的姿勢、過剰な教育的情熱を重荷に感じ、拒食症を発症する Alix がいる。これは、1924年ベルリンで Alix が Melanie Klein と出会った際の興奮を良く説明する。Klein はベルリン精神分析協会に孤立していた。フロイトの愛娘 Anna Freud と「超自我 *superego*」を巡る理論で対立していた。オーソドックスなフロイト理論の継承者たるアンナによれば、子供の超自我は父親の道德観を内面化することにより形成される。それゆえ、親による子の「教育」が重視される。Alix はそれを批判し、Klein の超自我に関する理論に魅了された。Klein の超自我とは、乳児が母親を「食べる」ことにより無意識に形成される。子供によって食べられた母の身体たる超自我は、子供の中に残存しそれを内部から食い破るサディズムに満ちる。その恐ろしい母親的超自我を子供が外部に排除、排泄しようとするプロセスがそれに続く。つまり、摂食と排泄が、子供の超自我の形成において決定的な意味を持つ。クラインの精神分析は、親による教育よりも母親に対する子供のパラノイアを強調する。

Alix は James への書簡で、アンナ・フロイトの教育重視の姿勢に接すると「学校時代のコンプレックス」を思い出すと述懐し、クラインをロンドンに招聘するための書類に自分自身の '*private phantasies*' が入り込むことを警戒している。James は、クラインの超自我を「去勢する母 *castrating*

mother」と称する。この背後に、母親に対する Alix のコンプレックスを読むことは難しくない。

フロイトの弟子に Karl Abraham がいる。彼はクラインを擁護した。アブラハムはベルリンでアリックスとクラインを同時に分析している。彼はクライン的な「摂食と排泄」の弁証法に関して先駆的な存在で、それを *psychosexual metabolism* と呼んだ。アリックスを分析したフロイトもアブラハムも Alix を「メランコリー」と診断する。「メランコリー」とは愛し 憎悪する対象を「体内化」、食べることにより、それが自我の中の超自我と化すプロセスのことである。アブラハムから引用し、この *psychosexual metabolism* を見てみよう。

[...] in paranoia the 'persecutor' can be traced back to the patient's unconscious image of the faeces in his intestines which he identifies with the penis of the 'persecutor' *i.e.* the person of his own sex whom he originally loved. Thus in paranoia the patient represents his persecutor by a part of his body, and believes that he is carrying it within himself. He would like to get rid of that foreign body but cannot.

Karl Abraham, 'A Short Study of the Development of the Libido, Viewed in the Light of Mental Disorders' *Selected Papers on Psychoanalysis* trans., Douglas Bryan and Alix Strachey (London: Karnac, 1988) 489.

アブラハムは男性患者について論じているが、ベルリンで多くの女性患者を分析している。その中にアリックスとクラインがいた。重要なのは、食べた対象が排泄できず体内に残存すること、そのパラノイア的不安であるが、それは身体的症状でいえば *constipation* 便秘となる。「摂食と排泄の弁証法」たる *psychosexual metabolism* のパラノイア的機能不全としての *constipation*、その精神分析がアブラハム、クライン、アリックスに共有された。この便秘とは、患者が同性の親のペニスを食べながらそれを排泄できずにいて、その体内に残存する便が荒ぶる超自我あるいは迫害者として子供を体内から破壊することを意味する。

1922 年のアリックスの症例研究を見てみよう。この症例はじつはフロイトによるアリックスの分析の剽窃であると論じられている。つまりこのテクストにおける患者とはアリックスであり、その患者は「慢性的な便

秘」に悩まされている。このテキストはアリックス自身の夢の分析である。そこでは「妊娠した女」が中心的イメージとなり、それはアリックス とアリックスを生んだ母親を同時に表象する。さらに便秘と妊娠との無意識的な連想が強調されている。そして、妊娠した母親像が夢の中で「荷馬車を引く馬」と結びつく。「荷馬車を引く馬」はフロイトの症例「ハン ス少年」を連想させる。ハン ス少年の去勢不安をこの馬が表象していた。アリックスの夢において母親像と結びつく馬は、「去勢する母親」に対する不安を表象している。重要な点は、フロイトがアリックスの「去勢する母親」を分析できなかったという事実である。この失敗ゆえフロイト はアブラハムにアリックスの分析を託す。そのアブラハムが *psychosexual metabolism* の研究をしていた。

クラインは、アブラハムの理論に準拠した症例分析を詳述し、先ほど引用したアブラハムのテキストへ言及する。別の症例で 6 歳の女の子は、自分が食べた母親のペニスが体内に残存し、それが自分の大腸を食い破るといふパラノイアに苛まれるが、この患者をクラインの前に分析していたのがアブラハムであった。ジェイムズに宛てたアリックスの未刊行の手紙 は、体内に残存する便を‘*original castrator*’と見なし、またこの時期の彼らの書簡においてアリックスの慢性的な便秘は最も頻繁な話題であった。ハン ス少年においてフロイトは「妊娠」と「便秘」を接続しながらそこで解釈を放棄した。アリックスとクラインは、ハン ス少年の分析を「失敗」と語り、フロイトよりも優れた分析家としてアブラハムを評価している。つまり、アリックスがフロイトの分析を受けた 2 年後に発表したあの症例分析は、フロイトが分析できずにいた母親に対する去勢不安を、アリックス自身が自己分析をし、フロイトの失敗を修正したテキストである と見なすことができる。あの妊娠した母親像は、アリックスを妊娠する母と同時に、母を大便として妊娠するアリックスの去勢不安を表象していた。

アリックスの症例研究を、フロイトを剽窃したテキストと読む論者は、フロイトの「徹底操作 *working-through*」を強調する。「抑圧」とは、トラウマ的記憶を忘却していること>を意味する。その抑圧された無意識的内容を「徹底操作」するとは、トラウマ的体験を想起することによってそ

れを忘れることを意味する。その作業をアリックスがフロイトに関して行っているという解釈がここにある。フロイトの分析を引用しそれを剽窃する行為は、フロイトを思い出し忘却する無意識的作業と見なされる。

「精神分析の父」たるフロイトに対する **Alix** の去勢不安を強調する解釈だ。

この解釈はフロイトと同様「父親中心主義」的であり、第一次世界大戦後の「母娘関係」を抑圧している。「母娘関係」を巡る去勢不安の精神分析であったアブラハム、クライン、アリックスにおける **psychosexual metabolism** とは、「母」というトラウマ的対象に関する「徹底操作」であった。抑圧された母親を想起しつつ忘却し、それから解放される作業を、戦後に「解放された娘」である女性分析家が必要とした。この理論は二重の意味で「カタルシス」的だ。「カタルシス」とは「徹底操作」という理論以前のフロイトの概念で、抑圧された無意識的内容の解消を意味する。同時に「カタルシス **catharsis**」とは下剤による排便 **defecation** を意味する。

アリックスの身近で精神分析受容を目撃していた **Virginia Woolf** は母親に対するオブセッションを露わにした『燈台へ』を 1927 年に出版する。ヴィクトリア朝的な「家庭の天使」の殺害を小説家の自立の条件としたウルフは、この小説の執筆に関して「精神分析家がすることにより、母のオブセッションから解放された」と回想録で述懐する。そこで採用されるレトリックは **psychosexual metabolism** である。消化器系の管の隠喩となった **pipe** からあふれ出る **bubble** は、排泄としてのカタルシスを連想させる。

It is perfectly true that she [the mother] obsessed me, in spite of the fact that she died when I was thirteen, until I was forty-four. Then one day walking round Tavistock Square I made up, as I sometimes make up my books, *To the Lighthouse*; in a great, apparently involuntary, rush. One thing burst into another. Blowing bubbles out of a pipe gives the feeling of the rapid crowd of ideas and scenes which blew out of my mind, so that my lips seemed syllabbling of their own accord as I walked. What blew the bubbles? Why then? I have no notion. But I wrote the book very quickly; when it was written, I ceased to be obsessed by my mother. I no longer hear her voice; I do not see her. (emphases added) Virginia Woolf, 'A Sketch of the Past'

Moments of Being: Unpublished Autobiographical Writings ed., Jeanne Schulkind (New York & London: Harcourt Brace, 1976), 81.

ウルフは『燈台へ』執筆によって、無意識に抑圧されたトラウマ的母との「育児室の戦争」を想起しつつ忘却するという「徹底操作」を実践した。その身体的かつ精神分析的な表象として引用箇所は、同時代のイギリスの精神分析と連動し、戦後イギリスの「母娘関係」というトラウマ的体験を露わにしたテキストである。